

第8章 動物相とその特色

I. 鳥類

山口喜盛¹・石井隆²・浜口哲一²・青木雄司¹・白鳥勝洋¹・平田寛重²・斎藤常實³・西ヶ谷修一³・岩佐昌夫³・川手隆生¹・荒木尚登¹・藤井幹¹・望月和芳¹・佐藤誠三¹・四角目勝二¹・井上基¹

要約

丹沢山地の鳥類相について、線センサス法によって、その群集構成を把握し、また特に重要な種については生態と分布の調査を実施した。

1. 過去の記録も合わせると、丹沢山地で記録された鳥類は37科158種であった。
2. 自然林の植生別の優占種としては、ブナ林では繁殖期にはウグイス・ヒガラ・エナガ、越冬期にはアトリ・エナガ・コガラ、モミ林では繁殖期にはウグイス・ヒガラ・ヒヨドリ、越冬期にはエナガ・マヒワ・ヒヨドリがあげられ、全体的にはカラ類が優占していた。
3. 丹沢の食物連鎖の中で最上位に位置するクマタカについて分布調査を行い、ほぼ全域に生息することが明らかになった。
4. 従来、分布上の知見が少なかった夜行性鳥類について、全域の分布調査を行い、コノハズクなどの生息を確認した。
5. 注目される種であるオオアカゲラとクロジについて分布調査を行い、太平洋側山地としては初記録となるクロジの繁殖を確認した。
6. 海水を吸飲するという特殊な習性を持つアオバトについて観察を行い、丹沢山地のアオバトが大磯海岸へ飛来するルートなどについて知見を得た。
7. 今後、増加が予想される帰化種のソウシチョウについて生息状況をまとめた。

1. はじめに

丹沢山地の鳥類については、柴田(1964)による目録があり、32科97種が報告されている。また、日本野鳥の会神奈川支部では全県的な鳥類目録を刊行しているが、標高500m以上の丹沢山地および丹沢湖の記録として、1集では30科98種(日本野鳥の会神奈川支部，1986)、2集では37科136種(日本野鳥の会神奈川支部，1992)が掲載されている。また、山口(1991)は、山麓地域も含めた範囲で、37科131種を記録した。これらのまとめによって、丹沢山地の鳥類相については、その種類構成がほぼ解明されている。しかし、個体数についての調査が十分行われていないために、植生や標高による群集構成の違いについては、知見に乏しい。

また、丹沢山地にはクマタカ・オオアカゲラ・クロジなどその生態系の中の位置や、地理的分布などからみて稀少な鳥類が生息しているが、それらの生態や分布についても未解明な点が多かった。

そこで本調査では、まず丹沢山地の環境を代表するようなコースを設けて、センサス調査を行い、群集構成の把握を試みた。次に、コノハズクなどの夜行性鳥類、クマタカ、クロジ、オオアカゲラなどについて個別の調査を行った。その他、丹沢山地のアオバトは大磯町の照ヶ崎海岸へ海水の吸飲のために飛来することが知られており、他地域の生態系と密接な関係を持つ鳥の例として調査対象に加えた。また、近年、個体数が増加傾向にある帰化種のソウシチョウについても、現在の分布についてとりまとめた。

現地調査には、執筆者の他、相本大吾・石井悟・石郷岡卓哉・石田和男・伊藤治・大野正人・神戸宇孝・小山克・

桜井悦子・坂本堅五・佐々木祥仁・塩沢徳夫・神保健次・末次加代子・末吉哲夫・鈴木茂也・添田弘幸・田口明・田中和徳・田仲謙介・永田幸志・中村道也・土屋昌子・富田俊一・中田利夫・中田洋介・西島淳子・羽太博樹・前田ゆかり・丸岡礼治・箕輪義隆・本村健・山崎宏・吉田文雄およびこまたん会員の諸氏に調査員として参加協力を頂いた。また中村道也氏には貴重な情報を提供して頂いた。これらの方々に厚くお礼申し上げる。

原稿執筆は下記の分担によって行い、浜口哲一が全体を調整してとりまとめた。

群集構成：石井隆
クマタカ：山口喜盛
夜行性鳥類：青木雄司
クロジ・ソウシチョウ：白鳥勝洋
オオアカゲラ：平田寛重
アオバト：斎藤常實・西ヶ谷修一・岩佐昌夫

1：丹沢鳥類研究会 2：日本野鳥の会神奈川支部 3：こまたん

8. 丹沢山地と相模湾を結ぶアオバト

8-1. 丹沢山地のアオバト

アオバトは、ハト科に属する緑色のハトで、おもに夏鳥として飛来する。5月～11月にかけて塩分補給のため海水や塩分を含んだ鉱泉など吸飲する生態があり、丹沢のアオバトは「アオバトの集団飛来地」として県の天然記念物に指定されている大磯町照ヶ崎海岸（以下照ヶ崎）へ飛来し海水吸飲を行っている。このように、アオバトは丹沢の自然と相模湾の自然をつなぐ存在としてきわめて特異な存在である。

しかし、5月～11月にかけて丹沢に渡って来るアオバトの繁殖状況や個体数などについて調査した報告は山口(1994)による繁殖例の報告だけで、生態についてもわからない状態であった。個体数についても照ヶ崎で観察される

ような数百羽単位の数を丹沢で観察することはできず、その実数には謎が多い。

調査グループの「こまたん」は1991年から照ヶ崎を中心にアオバトの生態および飛来ルートの解明にあたってきたが、ここでは、特に丹沢山地から照ヶ崎にいたる飛来ルートや、丹沢山地での生態について観察した結果を報告する。

8-2. 調査地と調査の方法

丹沢のアオバトは塩分補給のため1日の間に長距離の移動を行っており、調査時間や、観察場所により観察個体数が著しく違う。今回は、アオバトの生息地と考えられるブナ林周辺（堂平周辺及び塩水林道）、塩分補給のための移動ルートになっているヤビツ峠周辺の3ヶ所で定点観察を行った。

各調査地の標高と環境は下記の通りである。

- ・堂平周辺／標高1000～1200m ブナ林
- ・塩水林道周辺／標高700～800m ヒノキ植林と落葉広葉樹林
- ・ヤビツ峠周辺／標高700～800m ヒノキ植林と落葉広葉樹林

1993年の観察は4月3日から11月3日の間に行い、各観察地での観察日数は堂平周辺で10日間(のべ49時間)、塩水林道周辺で8日間(のべ42時間)、ヤビツ峠周辺で10日間(のべ67時間)、合計30日間(のべ158時間)であった。

1994年の観察は4月16日～8月6日の間に行い、各観察地での観察日数は堂平周辺で7日間(のべ31時間)、ヤビツ峠周辺で3日間(のべ19時間)、合計10日間(のべ50時間)であった。

8-3. 調査の結果

①堂平

1993年の初認は4月18日に声を確認し、5月5日には7時～13時の間に77羽(同時最大羽数7羽)、5月8日には8時～12時の間に85羽(同時最大羽数14羽)を観察した。しかしその後同地でこのような多数のアオバトを観察することはなかった。

興味ある行動として5月5日に、1本の木に4つのペアが止まっており、各ペアの雄雌は寄り添いじっとしているのを観察した。

1994年はアオバトの活動する時間帯を確認するため4時から5時台に観察を開始した、その結果アオバトの活動する時間帯のピークは5時～6時台であることが分かった(図8-1-11)、もっとも早い観察例は6月4日の4時41分であった。

②塩水林道

この付近ではひんぱんに森の中に入るアオバトを多数観察し、巣が発見できるかと思われたが今回は発見にいたらなかった。またヤマグワの実を採餌しているのがよく観察され、ニホンザルが近くでヤマグワの実を食べていても気にせず一緒に採餌していた。

時間的には14時～15時頃に観察羽数のピークがあった(図8-1-12)。また、同時最大羽数は1993年6月27日の14羽であった。

特に変わった行動としては、6月19日11時15分に、雨の中でヒノキの木に8羽が止まり、片方の羽を広げ羽の裏面

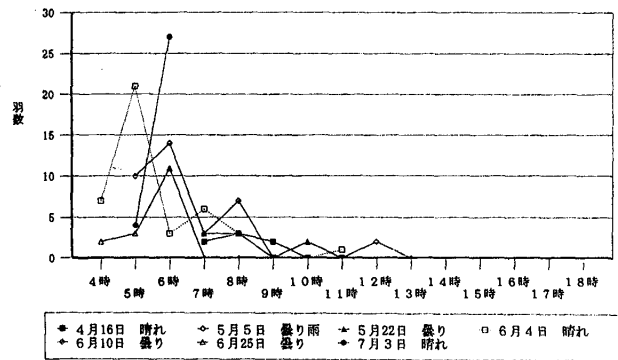


図8-1-11. 堂平におけるアオバトの出現時間

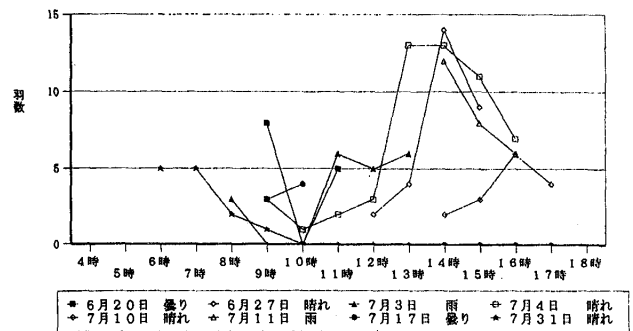


図8-1-12. 塩水林道におけるアオバトの出現時間

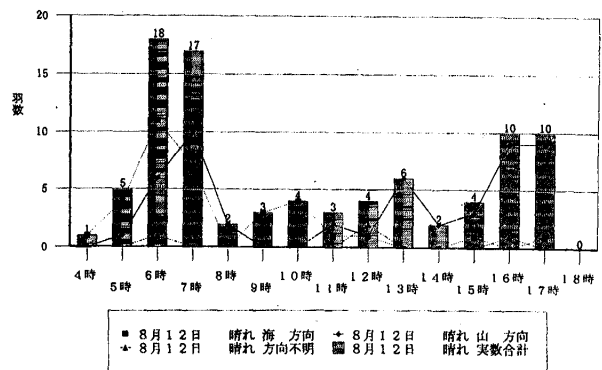


図8-1-13. ヤビツ峠におけるアオバトの移動

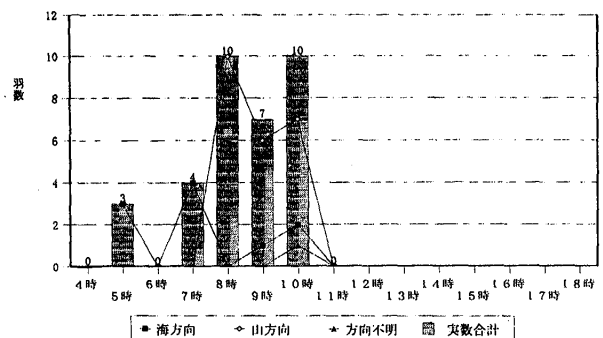


図8-1-14. 霧の日のヤビツ峠における移動

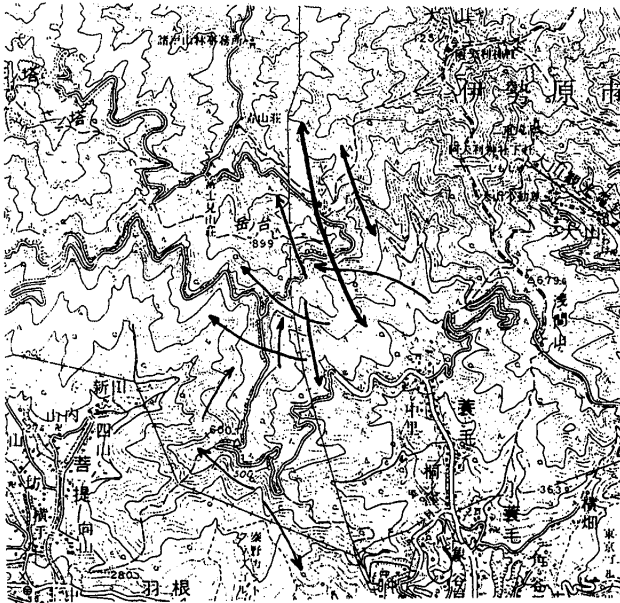


図8-1-15. ヤビツ峠付近のアオバトの飛行ルート
(国土地理院 1 : 50,000 地形図 秦野)

と白い腹部を天に向け、のけぞるようにして8羽全てが雨浴をしていた。

③ヤビツ峠

ヤビツ峠周辺では照ヶ崎方面への移動と海方向からの帰還ルート及びその羽数の観察をおこなった。

1993年8月12日は4時25分から18時まで終日観察を行った(図8-1-13)。もっとも早い観察例は4時57分で1羽が海方向に移動していった。海方向のピークは6時台にありその1時間後に海からの帰還のピークがあった。その後16時台、17時台に帰還のピークがもう1度あった。この日は海方向34羽、海からの帰還51羽、方向不明4羽、声3羽の合計92羽を観察した。

移動するアオバトは最後まで追えないが海方向に移動するとき、ふもとの葦毛方向にまっすぐ下がって行くのを何度か観察している。また海方向から帰還するアオバトが葦毛方向からまっすぐに上がって来るのも観察した。

雨の日でも視界がよければアオバトの移動を観察できたが、霧などで視界が悪い日は観察しづらいということもあるが観察羽数は少なかった(図8-1-14)。

また、ヤビツ峠やその周辺で移動ルートの観察を行った結果広い範囲で移動している事が明らかになった(図8-1-15)。

8-4. 考察

①丹沢の天候とアオバトの行動

照ヶ崎での飛来羽数の観察をしていると天気の良いのに飛来羽数が少なくなる日があり、その理由が分からなかった。そこで、丹沢の天候に注目し、丹沢方面が霧や雨などで視界が悪く、しかも照ヶ崎が晴れ又は曇りの日に、同時時間帯の観察記録を比較してみた。なお、照ヶ崎の記録は全て吉田敬一氏によるものである。下記のその2例を示した。

・1993年6月6日

丹沢 堂平駐車場周辺では霧が深く視界がほとんど無く

7時30分～10時30分までの観察で声を4回聞いただけであった。

照ヶ崎 朝方曇りであったが4時～7時までの記録では総飛来羽数81羽、同時最大数15羽(通常この時期、同時時間帯の観察の総飛来羽数は200～300羽程度)と極端に少なかった。しかし8時30分～10時頃の観察では同時最大羽数は60羽程度に増えていた。

・1994年7月17日

丹沢 ヤビツ峠で5時から観察を開始したが天候は霧で視界が悪く、5時～8時までには観察した羽数は7羽のみで、8時半頃より多少晴れてきてアオバトの観察羽数が多くなった。

照ヶ崎 朝から快晴であったにもかかわらず4時15分～7時までの観察では総飛来羽数254羽、同時最大羽数43羽(通常この時期、同時時間帯の観察の総飛来羽数は400～500羽程度)で通常の半数程度であった。

その他、同時時間帯の観察ではないが他の記録も比較してみると、照ヶ崎の天候が晴れでも丹沢(ヤビツ峠周辺や堂平周辺)が霧か雨で視界が悪い日では総飛来羽数が少なかった。

このことから早朝、丹沢の天候が霧又は雨で視界の悪い日は照ヶ崎への飛来が少なくなり、丹沢方面の視界が良くなるにつれ照ヶ崎の飛来羽数が多くなることがわかった。

②アオバトの活動時間について

アオバトの1日の行動はどのようになっているのだろうか。各観察地の観察羽数のピークを見ると、堂平周辺では5時～6時台、塩水林道周辺では14時台、ヤビツ峠周辺では海方向6時台、帰還するものは7時台と16時台の2回であった。

「大磯町照ヶ崎海岸におけるアオバトの生態」(こまたん, 1992)によると照ヶ崎では7時～8時台と15時～16時台に飛来数のピークがあることがわかっており、それとあわせて考えてみると、繁殖地と思われる堂平周辺で5時～6時台に活動を開始したアオバトは6時台にヤビツ峠周辺を通過し丹沢を出て、7時～8時台に海水吸飲場所の照ヶ崎へ飛来するということが推定される。

照ヶ崎で観察していると7時以前には雄が、7時以降には雌が多く観察されるが、そのことと、ヤビツ峠で帰還のピークが7時台にあることが関係があるかもしれない。

この活動時間も季節や前日及び当日の天候により多少違ってくるようだ。

③渡り直後の行動について

堂平では5月5日、5月8日に多数のアオバトを観察したので、渡って来た直後の数日間は群れで行動しているようであった、その時いくつかのペアを観察したが興味ある行動は、5月5日に1本の木に4つのペアが止まっていて各ペアの雄雌は寄り添いじっとしていたことであった。これらの行動からは、渡り直後に群れで過ごし、その中でペアを作っていくことが推定される。しかし、越冬地の一つである岐阜県、滋賀県での冬期の観察では群れで行動しているの、その時点でペアができていない可能性もあり、実態は不明である。

渡って来てからどれくらいたつと塩水吸飲行動が始まるのだろうか。堂平周辺では5月5日には総数77羽(同時最

大羽数7羽)、5月8日には総数85羽(同時最大羽数14羽)を観察したが、照ヶ崎での初認は5月5日の2羽であり、数が多くなり始めたのは5月25日(4時~7時の観察)以後で総飛来羽数33羽(同時最大数15羽)を観察した。丹沢で多数のアオバトを観察した時期と照ヶ崎の飛来羽数の多くなった時期のずれが約20日ほどあった。照ヶ崎では初認後、本格的に数が増え出すのは例年2~3週間後となっている。

この時期の差に塩水吸飲行動を起こす要因がひそんでいる可能性がある。越冬地では塩水の吸飲が記録されておらず、塩水を吸飲する時期がどうして決まるのかを今後の調査で明らかにしたい。

④アオバトの生息個体数について

本調査におけるセンサスの結果によると、繁殖期のアオバトの個体数は観察時間7607分で81羽、ブナ林では観察時間3296分で43羽の観察結果がでており、その個体数は多くはない。

しかし、筆者らの観察では観察時間約9480分で727羽を観察しており、丹沢のアオバトは観察時間と場所により観察羽数に大きな差があることがわかった。

実数については不明であるが、照ヶ崎で観察されているアオバトは丹沢から飛来しているもので、1993年8月12日に照ヶ崎で観察された同時最大飛来羽数の440羽以上生息していることは確実である。

⑤照ヶ崎の糞から検出されたミヤマザクラの種子

筆者らは1995年に照ヶ崎海岸においてアオバトの糞内容の調査を行った(こまたん, 1996)。その中で報告した通り、丹沢山地の標高1000m以上に分布しているミヤマザクラの

種子が大量に検出され、そのことからアオバトが丹沢から照ヶ崎にまで海水を飲みに移動していることが証明された。

果実食に専門化したアオバトは7~8月頃の低地では果実が得にくくなる時期に、大量に得られる丹沢のミヤマザクラに依存しており、丹沢のアオバトにとってミヤマザクラの存在はきわめて重要といえる。

⑥海水吸飲のための飛行ルート

今回の調査でヤビツ峠周辺の広い範囲が、丹沢から照ヶ崎方面への移動の出入り口であることがわかった。なお、1991年の調査では、雨山峠周辺やカヤノ木棚の頭でも調査を行ったが、照ヶ崎と小田原の2方向に移動していた(こまたん, 1992)。今までに確認されている海への出入り口は上記の2か所であるが、調査が進めば他の場所もコースとなっているかもしれない。